国指定史跡
小湊フワガネク遺跡
解説資料

2012年

奄美市教育委員会

序　　文

2006（平成18）年3月20日，住用村・笠利町・名瀬市の3市町村が合併して，「奄美市」が誕生しました。

「奄美市」には，笠利地区を中心にたくさんの遺跡があります。「宇宿貝塚」「赤木名城」の2遺跡が国指定史跡に文化財指定されています。

名瀬地区にも，いくつかの遺跡がありますが，その代表的遺跡が「小湊フワガネク遺跡」です。1997（平成 9）年の発掘調査の直後から，専門家の先生方により遺跡の学術的重要性が指摘され，たくさんの研究成果が発表されてきました。

おかげさまにて，2010（平成22）年，小湊フワガネク遺跡は国指定史跡として文化財指定を受けました。

平成23年度から3ヶ年の計画で国庫補助事業「小湊フワガネク遺跡を学び地域活性化に活用する事業」を開始しました。平成23年度は，小湊フワガネク遺跡について，みなさんに理解を深めていただけるように，調査研究成果などをわかりやすくまとめた啓発普及用冊子を作成しました。

小湊フワガネク遺跡が所在する古見方地区は，全戸配布する予定です。また郷友会等を通じて，本土在住の古見方地区出身者にも配布を行い，郷土の遺跡が国指定史跡として文化財指定されたことを報告させていただきたいと思います。残部については，市内小中学校や観光業界等に適宜配布を行います。

この冊子を通じて，小湊フワガネク遺跡について理解を深めていただき，さらにはふるさと「奄美市」の歴史をひもとくお手伝いになれば幸いです。

平成24年3月30日

奄美市教育委員会
教育長　**坂　元　洋　三**

目　　次

1　小湊フワガネク遺跡の概要

2　小湊フワガネク遺跡の発掘調査

3　小湊フワガネク遺跡の取り組みの歩み

4　小湊フワガネク遺跡の学術的意義

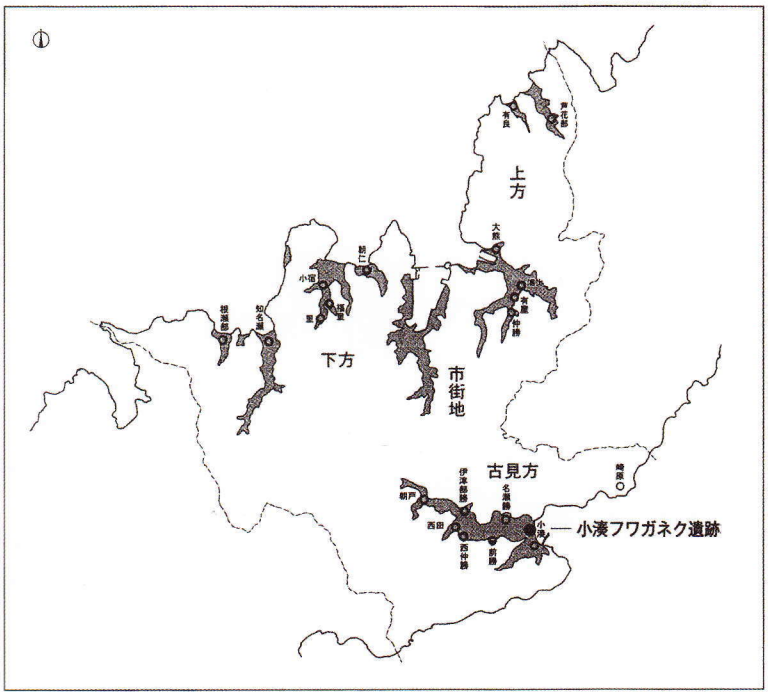
5　ヤコウガイ小事典

凡　　例

1　本書は，小湊フワガネク遺跡について理解していただくために，奄美市教育委員会が作成したものです。

2　小湊フワガネク遺跡の発掘調査における調査記録・出土遺物の一切は，奄美市教育委員会の奄美市立奄美博物館に保管されています。

3　本書は，山田和憲（奄美市教育委員会文化財室室長）の監修の下，高梨　修（奄美市教育委員会文化財室主幹）が編集・執筆を担当しました。



奄美市名瀬における
小湊フワガネク遺跡の位置

1　小湊フワガネク遺跡の概要

小湊フワガネク遺跡は，奄美大島奄美市の小湊集落に所在しています。

小湊集落は，太平洋に面していて，南北に広がる海岸線に沿いながら2列の海岸砂丘が発達しています。海岸側の砂丘は，奄美大島でも屈指の規模を誇る大型砂丘です。この砂丘の北側部分は畑地，南側部分は集落として利用されています。小湊フワガネク遺跡は，この畑地部分に所在しています。

1995（平成7）年4月，この砂丘上に学校法人日章学園「奄美看護福祉専門学校」（当時）が開校しました。1997（平成9）年，同校が計画した施設拡張事業に際して，名瀬市教育委員会（当時）が確認発掘調査を実施した結果，事業計画区域の一部から遺跡が確認されたため，発掘調査が実施されることになりました。

最初に遺跡が確認された小字「外金久」の地名から，遺跡名称は「小湊フワガネク遺跡」と命名されました。

1997（平成9）年の発掘調査の結果，おおよそ6～8世紀（1,500～1,300年前）に位置づけられる遺跡が確認され，人びとが活動していた様子を示す建物跡や使用していた土器破片や貝製の道具類等がたくさん発見されました。そのほか食べ滓と考えられる自然遺物（貝殻・獣骨・魚骨等）も多数確認されました。

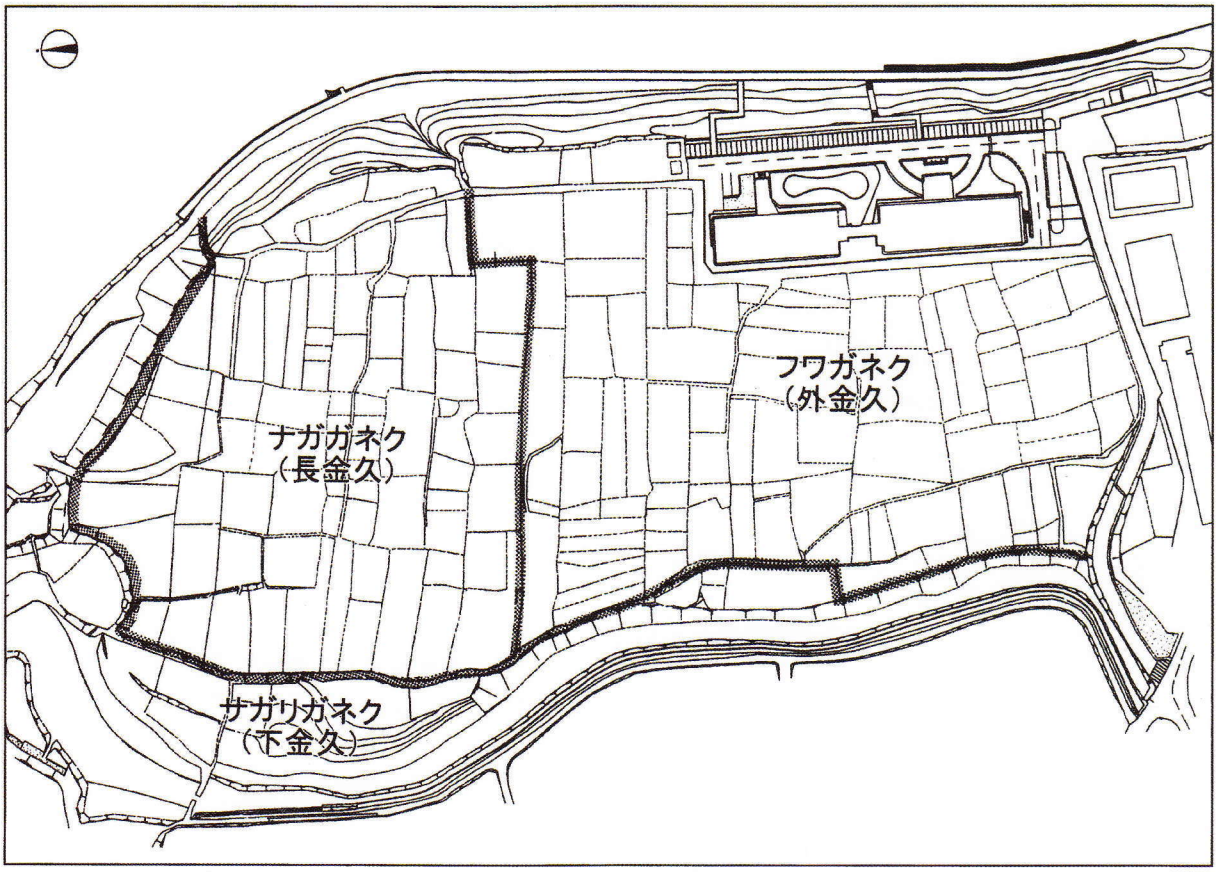
その後，2001（平成13）年と2002（平成14）年に遺跡範囲を確認するための発掘調査が実施されました。

その結果，7世紀の遺跡のほかにも，弥生時代後半から平安時代にかけて，複数時期の遺跡が小字「長金久」「下金久」にも連続して分布している事実が明らかになりました。遺跡が広がる面積は，約25,000㎡にも達しています。

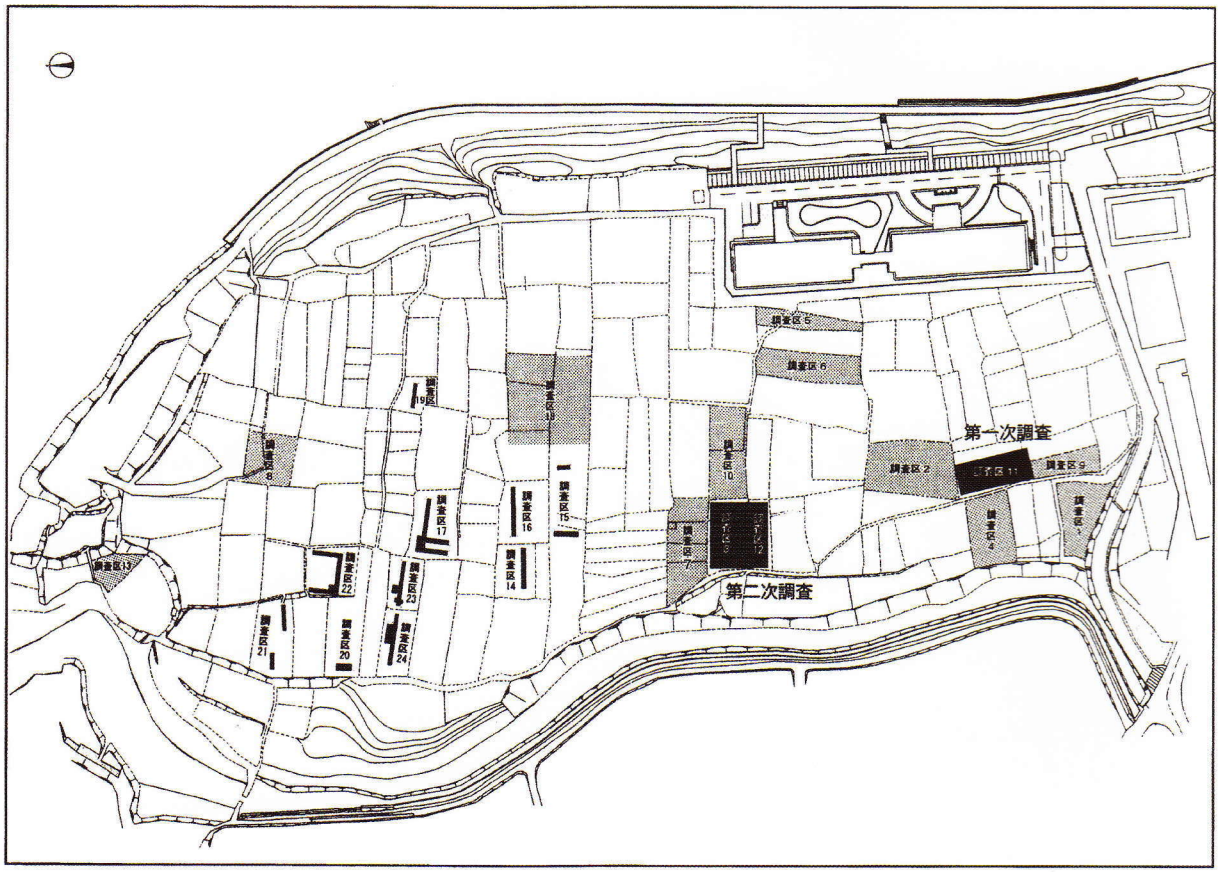
これらの遺跡全体の総称として，「小湊フワガネク遺跡」と呼んでいます。

小湊フワガネク遺跡の位置

小湊フワガネク遺跡の国指定史跡範囲（赤線枠内）



小湊フワガネク遺跡の小字



小湊フワガネク遺跡の発掘調査箇所

2　小湊フワガネク遺跡の発掘調査

1997（平成9）年の発掘調査は，「第一次調査」と「第二次調査」の2箇所で行われました。以下，それぞれの発掘調査の概要をまとめてみます。

第一次調査

調査区9・調査区10・調査区11で実施した発掘調査を「第一次調査」と呼んでいます。特に調査区11では，地表から2m前後の深さに遺跡が良好な状態で残されていて，狭い調査面積にもかかわらずたくさんの遺物が出土しました。調査実施面積は，250㎡を測ります。

調査区11から確認された遺構は，ヤコウガイ製貝匙の製作跡と考えられるヤコウガイ貝殻破片の集中箇所です。ヤコウガイ製貝匙破片21点，ヤコウガイ製有孔製品39点が出土しています。貝匙製作に使用する大型破片を貝殻から割り取る作業や貝匙の成形作業等が行われていたと考えられます。周辺からは，細かいヤコウガイ貝殻破片がたくさん出土しました。大型破片から成形しただけの貝匙未製品4点が一列に並べられた状態で発見されていることから，複数の貝匙製作がまとめて流れ作業で行われている様子も明らかになりました。

調査区11におけるそのほかの出土遺物は，それほど多くありませんでした。出土土器は少量で，奄美群島の在地土器である「兼久式土器」と呼ばれるものですが，722点が認められました。また鉄器も5点出土しています（釣針2点を含む。）。それからイモガイ製貝札（何に使用されるものなのか明らかにされていません。）6点，二枚貝有孔製品169点が出土しています。第二次調査で大量出土している貝玉は，第一次調査では全然出土しませんでした。さらに食料残滓と考えられる自然遺物（獣骨・魚骨）も，局部的に集中出土しています。釣針2点も，同じ場所から出土したものです。

第二次調査

調査区3・調査区12で実施した発掘調査を「第二次調査」と呼んでいます。地表から50cm～1.5m程度の深さに遺跡が良好な状態で残されていて，たくさんの出土遺物が確認されました。調査実施面積は，489㎡を測ります。

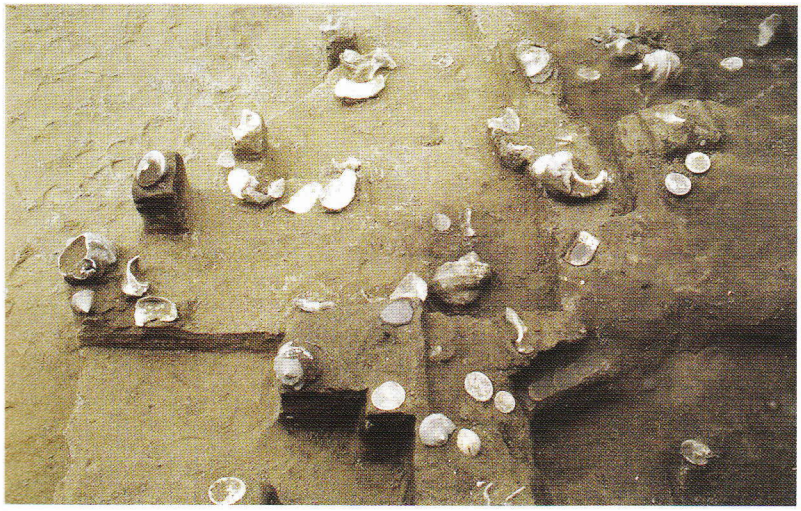
第二次調査区域は，地表から比較的浅い深さで，類須恵器・白磁・滑石製石鍋・布目圧痕土器・鉄器等を出土する中世の遺跡も認められましたが，遺物の数量はわずかでした。

中世の遺跡の下層に，第一次調査地点と同じ時期の遺跡が確認されています。掘立柱建物跡4棟やヤコウガイ製貝匙製作跡等が検出されています。掘立柱建物跡は，4棟とも長方形の平面形を呈していて，2m×4m前後の共通した規模が認められました。いずれも床面中央からやや偏向した位置に炉跡（地床炉）が設けられています。

またヤコウガイ製貝匙製作跡は，周辺にヤコウガイ貝殻が集積されたり，おびただしい数のヤコウガイ貝殻破片が集中した状態で検出されました。ただし，ヤコウガイ貝殻以外の貝殻を原材とする貝器も周辺からたくさん出土しましたから，貝匙製作以外にも貝器製作を実施していた場所と考えられます。ヤコウガイ製貝匙84点，ヤコウガイ製有孔製品15点のほか，イモガイ製貝札29点，イモガイ製貝玉2703点，二枚貝有孔製品169点等が出土しています。

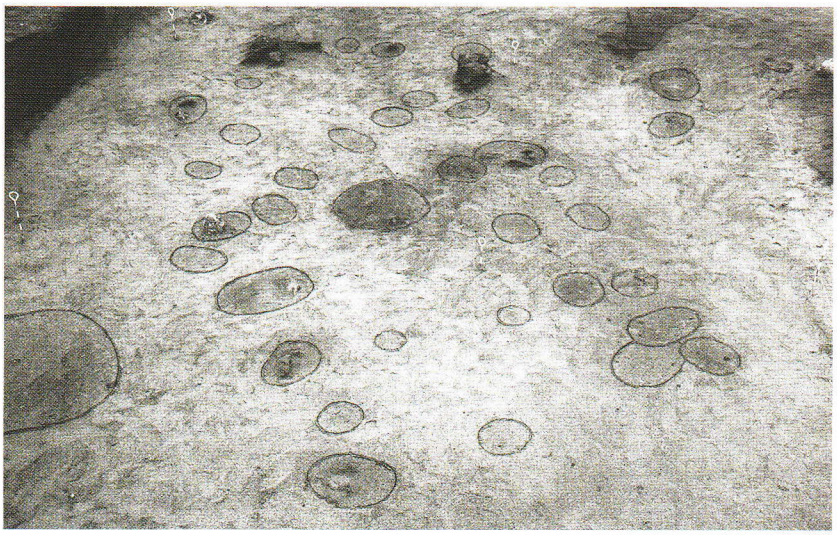
第二次調査は，そのほかにもたくさんの出土遺物が確認されています。出土土器は，総数17370点出土しています。そして鉄器17点が出土，第一次調査地点と合わせるならば合計22点の出土点数は注目に値すると考えられます。

そのほか研磨痕や敲打痕が残されている大小の石器が，貝匙製作跡の周辺部分から多数出土していて，貝器製作と関連して使用されていた可能性が高いと考えられます。また食糧残滓の自然遺物（貝殻・獣骨・魚骨等）も多数出土しています。



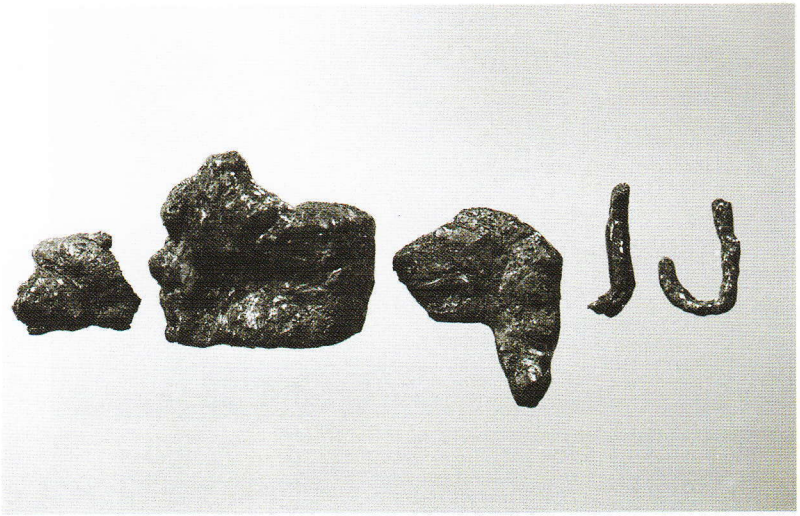
ヤコウガイ製貝匙の製作場所（第１次調査）

ヤコウガイ貝殻の集積遺構（第２次調査）

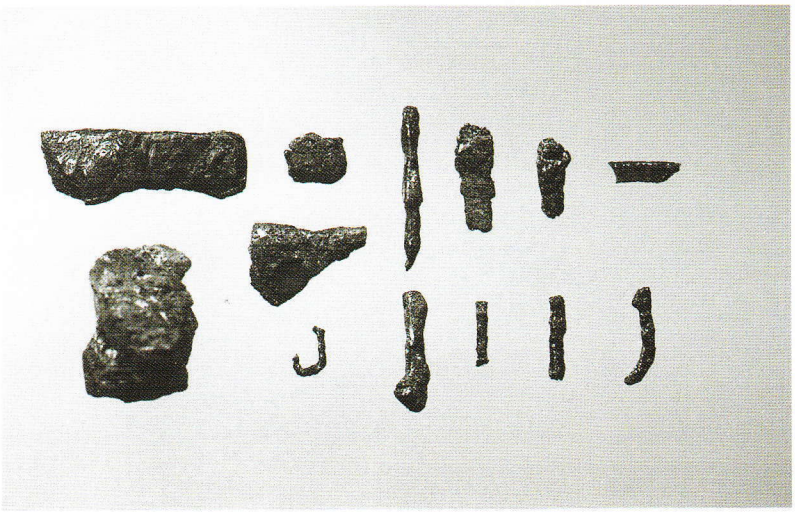


掘立柱建物跡（第２次調査）

小湊フワガネク遺跡出土土器（兼久式土器）



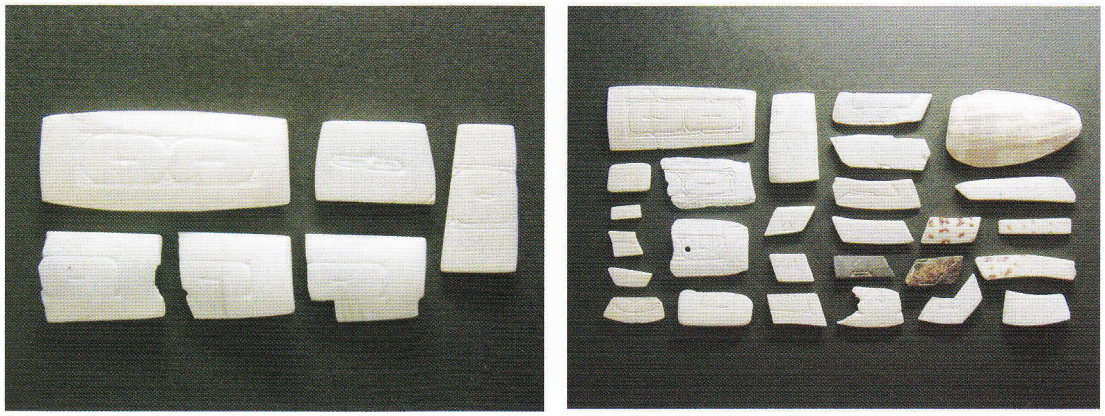
小湊フワガネク遺跡
出土鉄器（第１次調査）



小湊フワガネク遺跡
出土鉄器（第２次調査）

小湊フワガネク遺跡出土ヤコウガイ製貝匙

小湊フワガネク遺跡出土
ヤコウガイ製貝匙の未成品（第１次調査）



小湊フワガネク遺跡出土イモガイ製貝札（左：第１次調査　右：第２次調査）

小湊フワガネク遺跡出土ヤコウガイ製貝匙の複製（実物大の大きさです。）
製作：池村　茂氏（工房海彩代表）

3　小湊フワガネク遺跡の取り組みの歩み

小湊フワガネク遺跡をめぐる発掘調査，保護保存，啓発普及等の実施経過についても，まとめておきます。

(1) 平成8（1996）年度の歩み

平成8年9月19日，名瀬市小湊字外金久で行われていた砂採取工事箇所から，名瀬市教育委員会が遺跡を発見しました。学校法人日章学園「奄美看護福祉専門学校」の開発事業が，隣接する畑地一帯で計画されていたため，当該部分について，名瀬市教育委員会が確認発掘調査を実施，「小湊フワガネク遺跡」が発見されました。

(2) 平成9（1997）年度の歩み

「奄美看護福祉専門学校」の拡張事業に伴い，小湊フワガネク遺跡の緊急発掘調査が行われました。第一次調査は平成9年5月12日～6月14日まで，第二次調査は同年7月22日～12月19日まで行われました。

平成10年3月13日には発掘調査成果のスライド報告会が，平成10年3月21日には琉球大学法文学部教授の池田榮史氏による講演会「考古学からみた奄美諸島の歴史」が，名瀬市立奄美博物館で開催されました。

(3) 平成10（1998）年度の歩み

平成10年7月20日，鹿児島考古学会の平成10年度研究発表大会で，名瀬市教育委員会が発掘調査成果について報告しました。平成10年12月～4月まで，平成10年度奄美博物館企画展「よみがえる古代のメッセージ・名瀬市小湊フワガネク遺跡展」を，小湊福祉館・第8回名瀬市生涯学習振興大会古見方地区大会（大川小中学校）・名瀬市役所1階ロビー・名瀬市立奄美博物館の4箇所で巡回展として開催しました。

さらに小湊フワガネク遺跡の発掘調査結果を検討する機会として，平成11年3月28日，第2回奄美博物館シンポジウム「サンゴ礁の島嶼地域と古代国家の交流」も開催しました。平成11年3月31日，発掘調査概報1000部を発刊しました。

(4) 平成11（1999）年度の歩み

文化庁主催の平成11年度「発掘された日本列島」で，小湊フワガネク遺跡の出土遺物が全国で巡回展示されました（平成11年6月12日～平成12年2月6日）。平成11年8月15日～8月26日には，琉球大学を中心とする日韓共同学術調査が小湊集落で実施され，小湊フワガネク遺跡についても検討が行われました。

(5) 平成12（2000）年度の歩み

小湊フワガネク遺跡の遺跡範囲を確認するため，文化財補助事業「小湊フワガネク遺跡発掘調査等事業」が開始されました。

また平成12年度奄美博物館企画展として，「日本最北の亜熱帯に与えられた海の恵み・小湊フワガネク遺跡展2000」を，平成12年8月～平成13年1月まで開催しました。

(6) 平成13（2001）年度の歩み

文化財補助事業「小湊フワガネク遺跡発掘調査等事業」として，引き続き確認発掘調査が行われました。また平成13年度奄美博物館企画展として，「ヤコウガイ美の世界～池村茂夜光貝展・小湊フワガネク遺跡展」を，平成13年8月～平成14年1月まで開催しました。

平成14年3月18日，小湊フワガネク遺跡群をめぐる今後の保存活用について，指導助言を受けるための専門委員会として「古見方地区文化財整備検討委員会」が発足しました。さらに平成14年3月22日，小湊フワガネク遺跡の一部を「名瀬市指定文化財」として文化財指定しました。

(7) 平成14（2002）年度の歩み

文化財補助事業「小湊フワガネク遺跡発掘調査等事業」の遺跡範囲確認発掘調査の報告書を，平成15年3月31日に発刊しました（500部）。

(8) 平成15（2003）年度の歩み

平成9年度の発掘調査について，土器を中心に整理作業を進めました。

(9) 平成16（2004）年度の歩み

平成9年度の発掘調査報告書『奄美大島名瀬市小湊フワガネク遺跡群Ⅰ』を発刊しました（500部）。

(10) 平成17（2005）年度の歩み

平成9年度の発掘調査について，貝器を中心に整理作業を進めました。

(11) 平成18（2006）年度の歩み

平成9年度の発掘調査報告書『奄美大島奄美市小湊フワガネク遺跡群Ⅱ』を発刊しました（500部）。

(12) 平成19（2007）年度の歩み

発掘調査報告書の発刊が完了したので，奄美市教育委員会では，文化財指定に向けた取り組みを本格的に開始しました。小湊集落や遺跡部分に関わる地権者のみなさんに向けて，説明会を開催しました。

(13) 平成20（2008）年度の歩み

地権者のみなさんに対して，文化財指定について理解していただくために，説明会等を開催，文化財指定同意書をいただきました。

(14) 平成21（2009）年度の歩み

地権者のみなさんに対して，引き続き文化財指定に関する説明会等を開催，文化財指定同意書をいただきました。

平成22年1月，奄美市教育委員会は，小湊フワガネク遺跡の文化財指定について，21筆分14,018㎡の関係書類を添えて意見具申書を文化庁に提出しました。

(15) 平成22（2010）年度の歩み

平成22年4月，文化審議会で小湊フワガネク遺跡の文化財指定について審議が行われ，国指定史跡とする答申をいただきました。

平成22年8月5日，小湊フワガネク遺跡は，国指定史跡として文化財指定されました。

4　小湊フワガネク遺跡の学術的意義

小湊フワガネク遺跡からは，おおよそ6～8世紀（約1,500～1,300年前）に位置づけられる土器や貝器などの多数の出土遺物が認められました。その遺跡範囲は，約25,000㎡の広大な面積に達する様子も確認されています。

遺跡は，文字記録が残されていない時代の歴史や大昔の様子を知るための手がかりとしてとても重要なものです。奄美群島や沖縄県の島々の歴史は，学校の教科書に記述されている日本歴史とは異なる歴史の歩みがあります。文字記録が残されていない時代の奄美群島の人びとの暮らしは，まだ十分解明されてはいないのです。

だから，たくさんの遺物などが出土した小湊フワガネク遺跡は，歴史解明の重要な証拠となるのです。琉球弧（南西諸島）における海岸砂丘遺跡は，砂採取やリゾート開発などで著しい破壊を受けてきました。そうした事情を考えるならば，小湊フワガネク遺跡はきわめて良好な状態で残存しているとても貴重な事例なのです。

出土土器は，遺跡の年代を決定する上で，特に重要な手がかりとなる資料です。だから遺跡の年代研究の基礎資料として利用されています。小湊フワガネク遺跡からは，18,092点もの土器（兼久式土器）が出土しました。いわゆる「兼久式土器」と呼ばれる奄美群島特有の在地土器です。兼久式土器は，これまで出土資料の絶対数が不足していたことなどから，年代研究が遅れていました。弥生時代後期～平安時代という約1,000年もある長い年代に位置づけられていたのですが，小湊フワガネク遺跡の発掘調査で，短い年代幅の中に位置づけられると考えられる多数の土器群が確認できました。だから小湊フワガネク遺跡出土土器を基準にして，各遺跡における兼久式土器の器形・文様・共伴遺物（開元通宝・外来土器・貝札等）などの比較研究することも可能になりました。今後の遺跡の年代研究を進めていく際

の基礎資料になると考えられます。

それから小湊フワガネク遺跡を特徴づける出土遺物は，第一次調査・第二次調査で大量出土したヤコウガイ貝殻です。ヤコウガイ製貝匙の製作過程が解る資料や加工に伴う大量のヤコウガイ貝殻破片が確認されたため，これらのヤコウガイ貝殻は単なる食料残滓（食べかす）ではなく，貝器製作の材料として意図的にたくさん捕獲されていた事実が明らかになりました。ヤコウガイ貝殻が大量出土する兼久式土器段階の遺跡は，ほかにも土盛マツノト遺跡や用見崎遺跡（いずれも奄美市）などが知られていますが，いわゆる貝塚遺跡と区別するため，「ヤコウガイ大量出土遺跡」などと呼ばれています。

ほかにも巻貝や二枚貝で，いろいろな貝製品が製作されているので，小湊フワガネク遺跡は，貝器製作が集中的に行われていた場所だということが解ります。そうした貝器生産遺跡と考えられるものは，これまでにも数例が確認されていますが，いずれも緊急発掘調査によるもので，ほとんどの遺跡が消失してしまいました。保存状態が良い小湊フワガネク遺跡はたいへん貴重な事例であるといえます。

以上のような理由から，小湊フワガネク遺跡は，国指定史跡の文化財指定を受けたのです。

さらに小湊フワガネク遺跡からは，鉄器22点が出土しています。琉球弧の奄美群島・沖縄諸島・先島諸島の歴史は，12世紀前後から鉄器時代が始まるというのが通説です。ですから，小湊フワガネク遺跡から6〜8世紀段階の鉄器が出土した事実も，これまでの歴史理解を書き換える可能性を秘めた発見であるといえます。

小湊フワガネク遺跡の発掘調査は，まだ十分解明されていない奄美群島の古代史研究で，大和世界と交流する躍動的な奄美群島の新しい姿を描きはじめているのです。

5　ヤコウガイ小事典

ヤコウガイ（Turbo［Lunatica］marmorata）は，サザエの仲間になりますが，殻径・殻高はいずれも 20cm 前後，重量は 2kg を超す大型巻貝です。

生息場所は，サンゴ礁などの堅い岩場を好み，砂浜には生息していません。岩場に付着する藻を食べています。生息場所の環境にもよりますが，だいたい 7～8 年で 15cm ぐらいの大きさに成長するようです。

産業的多産地域（商品として輸出が可能なぐらいたくさん獲れる地域）として，フィリピン諸島，アンダマン諸島・ニコバル諸島（インド），琉球弧（特に奄美群島）の 3 箇所が知られていて，ヤコウガイの世界 3 大産地といわれています。

日本では，ヤコウガイは，江戸時代まで「ヤクガイ」と呼ばれていました。屋久島で獲れるからヤクガイと呼ばれたという説もありますが，7 世紀初頭には琉球弧の島々を総称して「ヤク」と呼んでいた時代がありますので，ヤク地方に産する貝という意味とも理解できそうです。奄美群島におけるヤコウガイの呼び名も，地域により多少の違いはありますが，「ヤクゲェ」などと呼ばれています。

平安時代には，宮廷貴族などの日記にたびたびヤクガイの名前が登場します。たとえば，有名な『枕草子』にも，「公卿，殿上人，かはりがはり盃とりて，はてには屋久貝といふ物して飲みてたつ」とヤクガイが酒盃として使われていた様子が記載されています。ほかにも「螺杯」という用語がたびたび出てくるのですが，ヤコウガイの杯ではないかと考えられています。

日本列島では，南海の亜熱帯海域にしか生息していないヤコウガイを，平安時代の都の宮廷貴族たちはどうして手に入れたのか不思議です。

平安時代に成立した『新猿楽記』という物語には，全国規模で活動していた「八郎眞人」という商人の様子が描かれていて，取り扱う物産の中に「夜久貝」と記されています。やはり平安時代の右大臣・藤原実資の日記『小右記』には，大隅国の藤原良孝が「赤木二切、檳榔三百把、夜久貝五十口」を送り届けてきたと記載されています。ヤコウガイは，交易品として都に運ばれていたのです。

それからヤコウガイは，「螺鈿」と呼ばれる美術工芸品の材料として欠かせないものでした。ヤコウガイ貝殻を用いる螺鈿技法が最も発達したのが，平安時代後期の11～12世紀です。ヤコウガイ貝殻は真珠質でできているため，磨くと銀白色に美しく輝くからです。世界遺産「平泉の文化遺産」を代表する中尊寺金色堂は，12世紀に建てられたものですが，数千個といわれるヤコウガイ貝殻が使われています。平泉政権を確立した奥州藤原氏は，「極楽浄土」を再現した寺院群を建築したのですが，そこには黄金とヤコウガイの輝きが使われたのです。平泉の寺院群建築には，大量のヤコウガイ貝殻が運ばれ，用意されていたと考えられます。

平安時代に都や平泉に運ばれていたヤコウガイはどこから運ばれてきたものなのか，これまで謎とされていました。中国の海南島などがその産地と考えられていましたが，はるか遠方から頻繁に大型のヤコウガイを大量運搬するのは，実際，至難の業ではないかと思われます。

1990年代における土盛マツノト遺跡（奄美市）をはじめとして，ヤコウガイ大量出土遺跡が奄美大島北部からつぎつぎ発見されはじめ，ヤコウガイ供給地をめぐる問題は急展開しはじめました。奄美大島から，ヤコウガイが搬出されていたのではないかと注目を集めているのです。

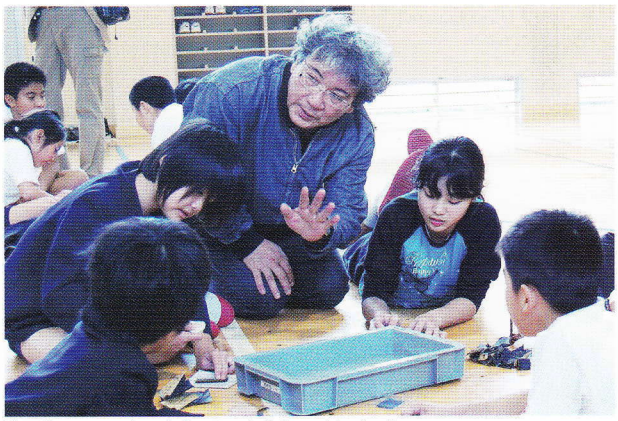
日本最北の亜熱帯・奄美群島で，ヤコウガイの集中管理が行われ，宮廷貴族の酒盃や螺鈿の材料として，本土に向けて貝殻が運び出されていたのではないかと考えられはじめています。

ヤコウガイ貝殻（実物大の大きさです。）

表面の石灰層をはがすと、下から美しい真珠層があらわれます。

製作：池村　茂氏（工房海彩代表）

ヤコウガイ・アクセサリー講座
自分の好きな材料を選びます

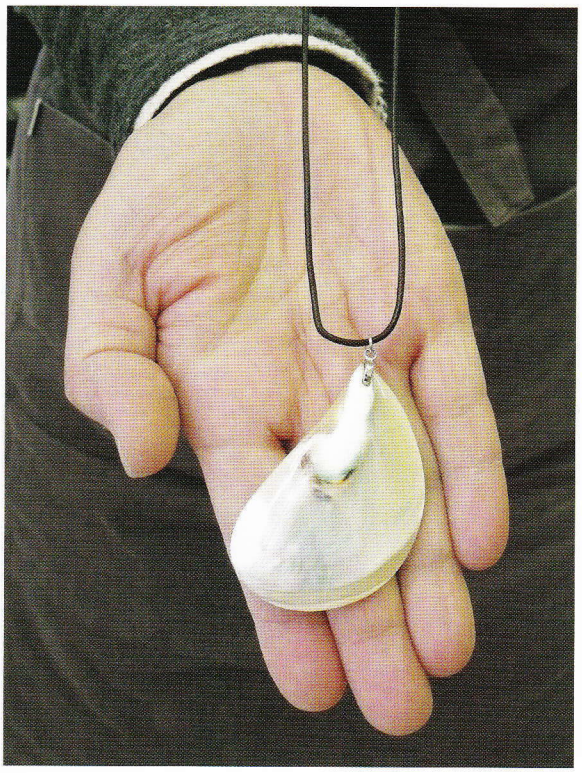


指導してくださる池村　茂先生

指導してくださる坂元愛子先生

世界にひとつだけのアクセサリーが完成

ヤコウガイ・アクセサリー製作講座（平成 24 年 2 月 22 日　奄美市立大川小学校）



ヤコウガイ・アクセサリー製作講座

小湊フワガネク遺跡とヤコウガイについて学びながら、世界にひとつだけのオリジナル・アクセサリー製作を行います

国指定史跡

小湊フワガネク遺跡

解説資料

編集・発行　奄美市教育委員会
〒894－5555
奄美市名瀬幸町19－21
発行年月日　2012年3月30日発行
印　　刷　(有) 栄印刷
奄美市名瀬長浜町10－7